



大震災から一年、神戸市街地と山並み(メリケンパーク上空から撮す・神戸新聞社提供)
右上は、ひょうフェニックス計画のシンボルマーク

はばたけフェニックス

松原 一郎

阪神大震災から丸一年。六三四人にもぼる人々が亡くなり、また、多くの人が、家屋・財産・健康・コミュニティなどさまざまなものを失ったことを思い出すにつれ、被災にもかかわらず、自分がここに生きている不思議をつくづく感じる。

夜明けの地鳴りは、自分一人でモンゴルの平原にボツンと立っているところに、十万の騎兵が怒濤のように押し寄せる悪夢だった。「殺られる」とのあきらめにも似た感覚がよぎったものの、「まだ死ねない。絶対に死なない」の決意が勝った。生きるか死ぬかは戦いである。敗北に身を委ねる訳にはゆかない。

あの時に分かった。雲仙・島原の人たちの苦痛が。グラン高原やボスニアの戦禍の生活にも思いあたった。トイレに不自由し、ガレキの町を移動する苦労は全身性の障害者の外出とオーバーラップした。世界に二千万とも三千万ともいわれる難民の生活をこうして垣間見た。あの時に分かった。自分にこれらの人々を想いやる想像力の欠けていたことが。ちょうど一年前の今ごろ、折しも入試監督のために、私は大阪と神戸を往き来していた。

武庫川を越えると震災とは別世界が広がっていた。そして大阪で見た神戸を伝えるTVの映像のよそよそしいこと。現場を伝えるテレビが逆に我々のイメージを同時にそぎ取ることができるとは…。

情報はそれを持っているというだけでは情報以外の何物でもない。想像力、共感、体験など何かプラスアルファが加味されないと智慧には程遠い。受験生のみなさんには、この受験を納得のいく戦いにしうえて、大学生活において智慧へのチャレンジを始めてもらいたい。十九歳というのは、いちばん傷つき、またいちばん傷つけるものと歌う人もいるが、そんな自分へのこだわりや他人との車間距離に対しての細やかな神経があるからこそ、一年前の自分よりも大きくなれるのだろう。

動機を奪い(四七歳期)、自立期(十七二十歳)を奪う社会だと野田正彰さんは、精神科医の目で現代社会を看破しているが、自立を奪い返す闘いをしてもらいたい。その闘いの陶冶のなかに自立が立ち現れてくるだろうから。

あ不安とパニックとそして破壊の中で、青春時代に好んで心に刻んでいたことが、舞い戻ってきていた。たしかへミングウェイではなかったか。人生は勝つこともあれば負けることもある。でも、生命は永遠なんだ、と。

そして生命は第一の宝である。社会福祉政策の研究者として、私はその生命を守り育てる学問に取り組み続けたい。このイチローもKOBEBEと共にがんばるゾ!! (社会学部教授)

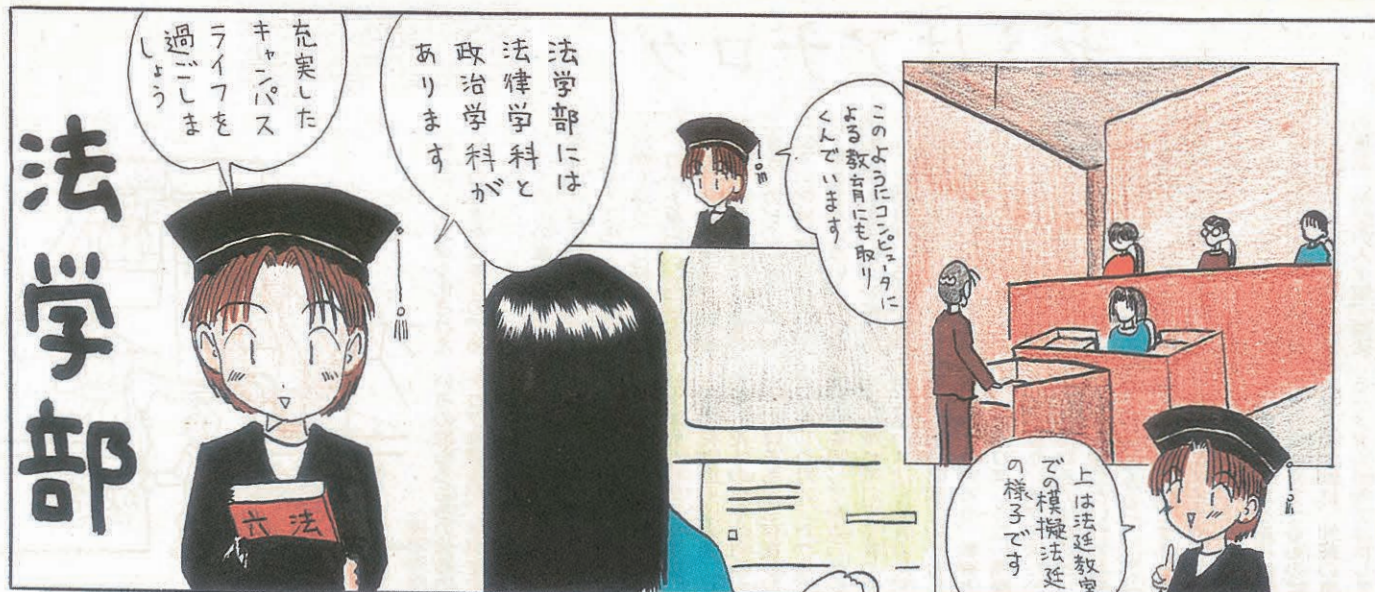
HEADLINE

- 2 面 受験生へのアドバイス
- 3 面 関大フォーラム
- 4・5 面 CAMPUS LIFE
- 6・7 面 特集「セミは楽しい!!」
- 8 面 総合図書館への招待

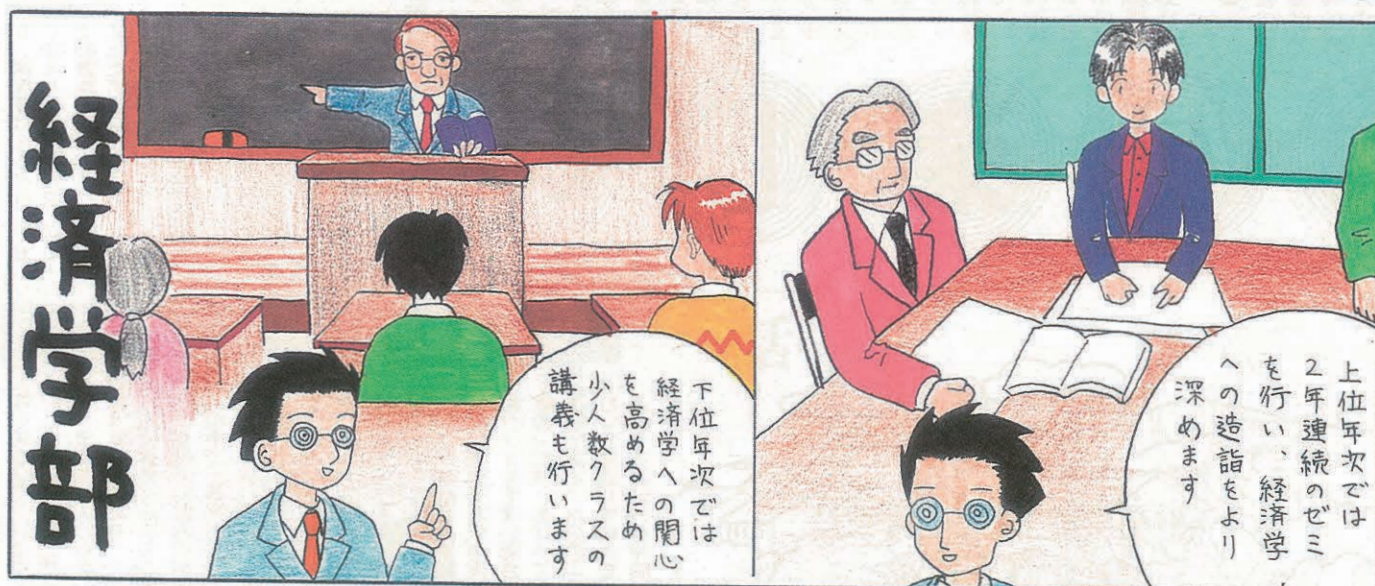
(Y・O)

平成六年度の就職戦線が氷河期と言え、七年度は超氷河期と言われ、いずれも新卒者を泣かす年となった。さて、今年度はどうなるかと心配が深まる。政府や経済界の大方の予想ではほぼ間違いなく景気が好転して、就職難も最悪期を脱するであろう。しかし、近年の就職難はバブル経済の崩壊による平成大不況の影響もあるが、情報処理機器のオフィスへの普及による影響も少なくない。最近、これらの機器類の普及によるオフィスオートメーション(OA)化が進められ、今まで殆ど手が付けられていなかった、いわゆるホワイトカラーの削減が図られ、ブルーカラーと比べれば低いと言われている生産性もかなり向上している。その影響を受けてオフィスが少数精鋭となつて採用者数が減つたのも理由の一つである。▼情報処理機器の普及と成熟化した情報化社会の到来に伴って、今後これらの機器類を取り扱う技能を必要とする職場、あるいは持っているに便利になる職場が大幅に増えるであろう。▼今年もまた入学試験のシーズンがやってきたが、受験生の皆様の合格を心から祈りつつ、四年後の就職戦争に勝ち抜くために在学の四年間に一所懸命にそれぞれの分野の専門知識を勉強しながら、情報機器を自由に操る技能を身に付けて欲しいものである。

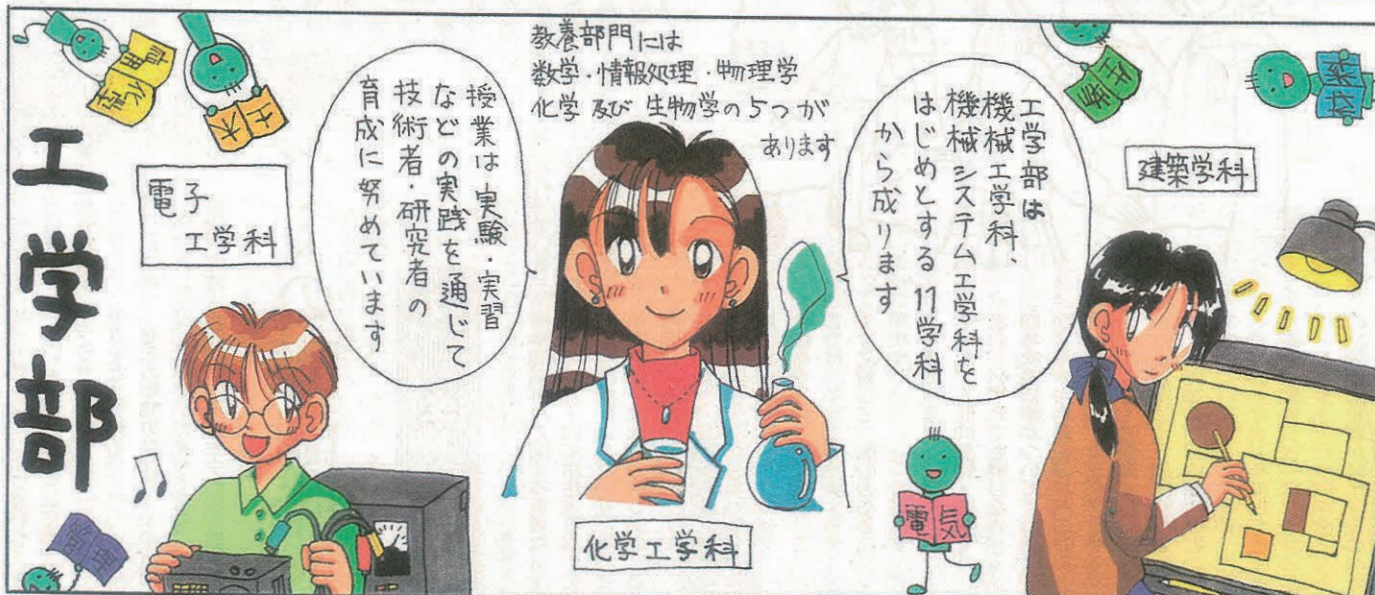
法学部



経済学部



工学部

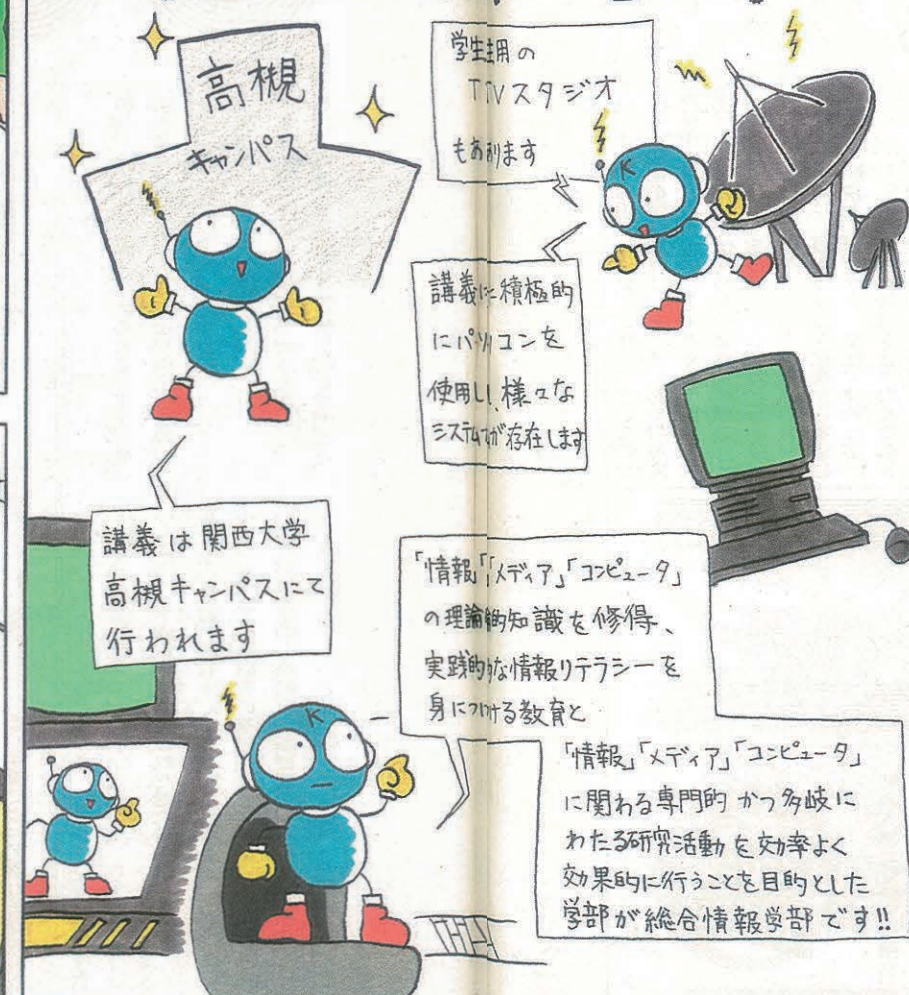


Campus Life

by 漫画同好会

by 漫画同好会

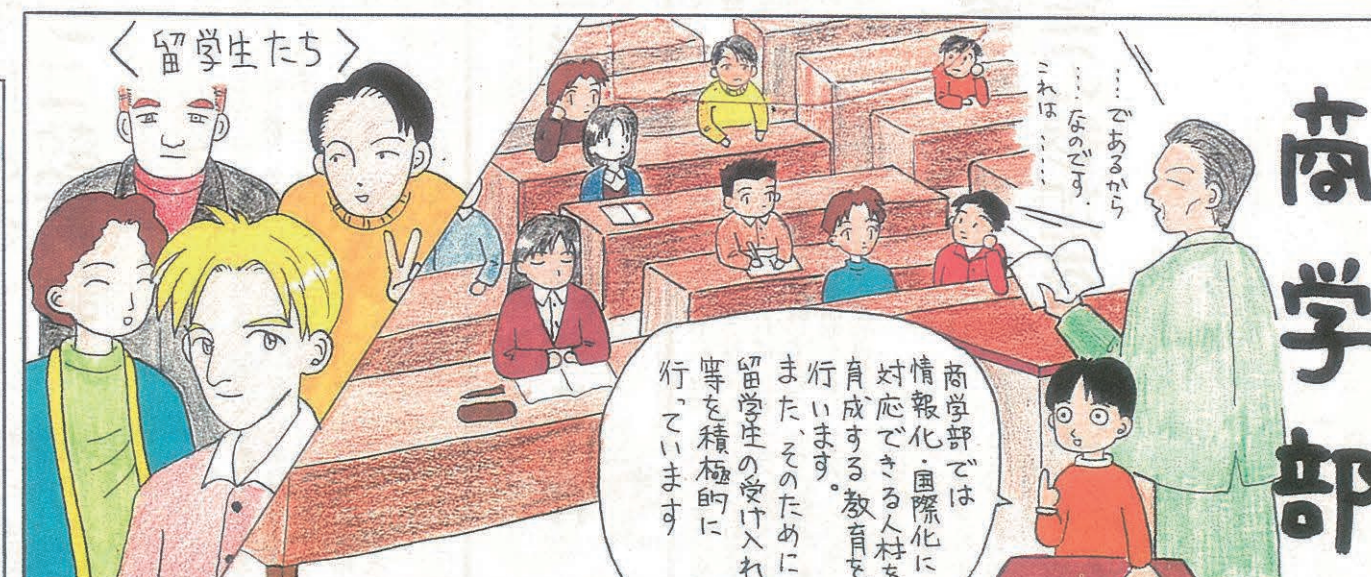
総合情報学部



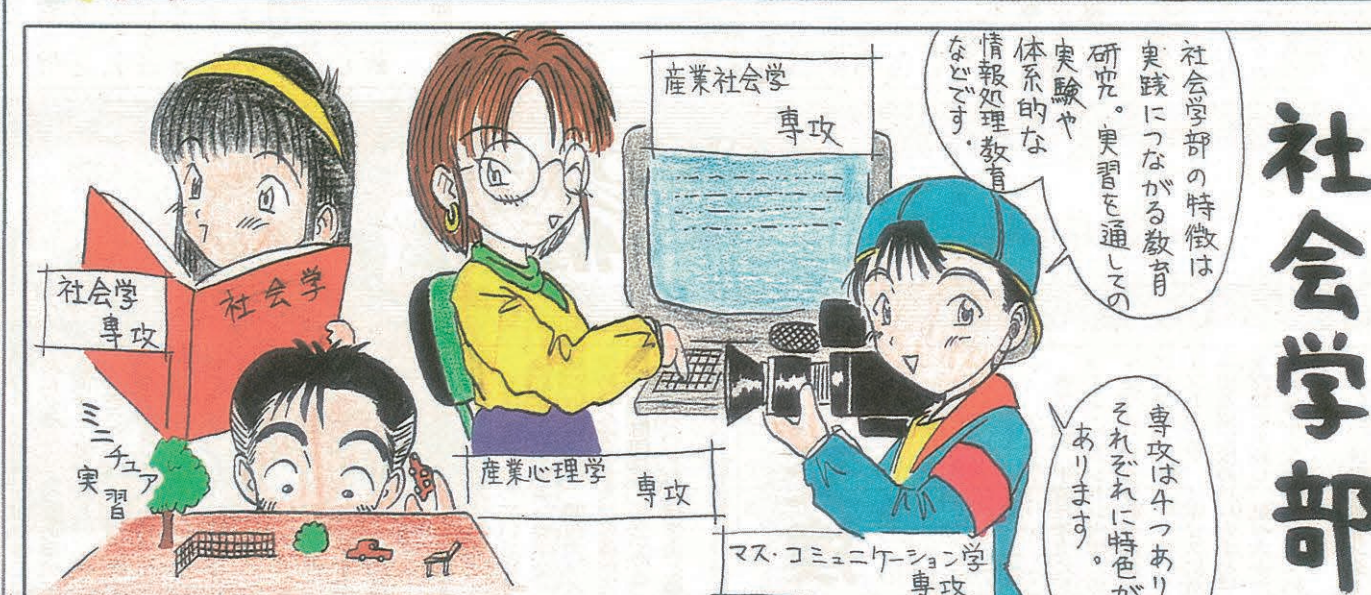
文学部



商学部



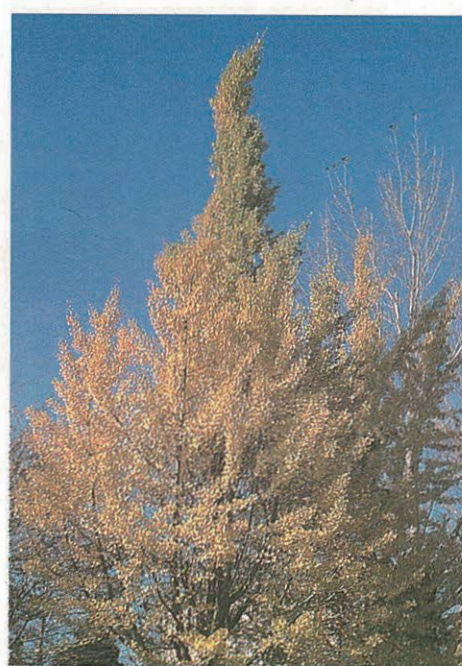
社会学部



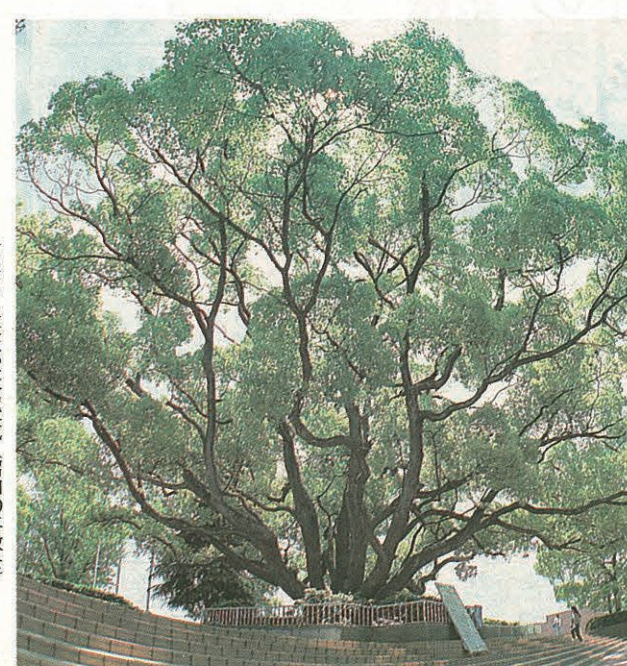
関西大学の歩み



【平成】



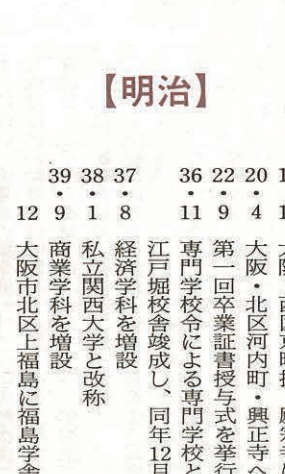
【昭和】



【大正】



【明治】





＜レファレンス室＞ 1階全体をレファレンス室と呼んでいる。ここにはメインとレファレンスの二つのカウンターのほか蔵書目録、新着雑誌、参考図書、新聞、複写及びマイクロリーダー等の各コーナーがある。

＜レファレンス・カウンター＞ このカウンターでは、レファレンス室に備え付けの辞書・事典・年鑑・統計・書誌等の参考図書約5万冊を使って、利用者の資料相談に応じたり、文献資料の探し方を指導したりするなど、利用者と資料を直接結びつけるサービスも行っている。



＜メイン・カウンター＞ 図書館蔵書の大部分が、地下の書庫に収蔵されている。このカウンターでは、百数十万冊に及ぶ書庫内図書を利用者に提供するほか、図書館の総合案内の役割を果たしている。

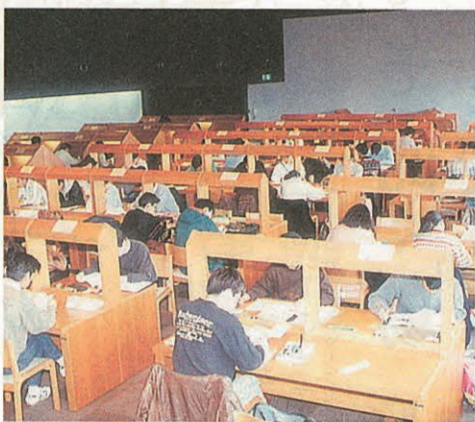


総合図書館への招待

＜総合図書館の全貌＞
本学図書館は、千里山キャンパスの総合図書館と平成六年度から開室した高槻キャンパスの高槻図書館からなっている。昭和六十年四月に開館した総合図書館は、全国の数ある大学図書館の中でもトップクラスの規模と設備を誇っており、特に図書館業務のコンピュータ化は一段と進んでいる。正面玄関を入ると、三階までの広い吹き抜け空間が、私たちが快適な読書の世界へと導いてくれる。



＜開架閲覧室＞
学生が最もよく利用するのは二階の開架閲覧室。中央エリアの辞書・事典・文庫本などを含めて、約十八万冊の学習用図書が諸君の利用を待っている。開架閲覧室は、中央エリアのほか、西エリアの人文・社会科学閲覧室と東エリアの自然科学閲覧室に分かれている。オンライン目録・AV・複写の各コーナーがあり、自由に使えるグループ閲覧室もある。



＜一般閲覧室＞
三階には異なった雰囲気をもつ読書空間が、東西に分かれて二つ設定されている。好みに応じて自由に座席を選べる仕組みである。



＜グループ閲覧室＞
三階にはグループ閲覧室が七室用意され、図書館蔵書を使って活発なグループ研究討論がなされている。

KUカレンダー

- | | |
|--------|--|
| 2月 | ◇入学試験(7日までと24日) |
| 1日(木) | ◇第2部スキースクール(12日まで) |
| 8日(木) | ◇院・学年末試験(14日まで) |
| 10日(土) | ◇入学試験合格者発表(14日、29日) |
| 13日(火) | ◇春季集中コミュニケーション講座(英語)(19日まで) |
| 14日(水) | ◇オーストラリア国立大学・関西大学日本語・日本文化事前研修 |
| 16日(金) | ◇アデレード大学春期英語セミナー(3/17まで) |
| 25日(日) | ◇冬期スポーツセミナー「スキー」(29日まで) |
| 29日(木) | ◇院・修士論文提出締切り(工研究科) |
| 3月 | ◇院・修士論文口頭試問(法・社各研究科)、公聴会(工研究科) |
| 1日(金) | ◇卒業成績発表 |
| 4日(月) | ◇追再試験受付(5日まで) |
| 5日(火) | ◇院・修士論文口頭試問(経・商各研究科)、公聴会(工研究科) |
| 6日(水) | ◇院・修士論文口頭試問(文研究科) |
| 8日(金) | ◇追再試験(9日まで、成績発表は3/18) |
| 12日(火) | ◇院・博士前期修了者、博士後期単位修得者発表 |
| 18日(月) | ◇経政産業セミナー(13:10 阪急グランドビル)「地域開発と情報」法・山本慶介教授、「大阪文化と政治家像」法・上林良一教授 |
| 19日(火) | ◇外国人留学生卒業歓迎会(16:00 100周年記念会館) |
| 19日(火) | ◇卒業式(10:00第1部・18:00第2部) |

次号は3月19日発行の予定です

新刊紹介

名著教授 谷沢永一著
「面白きかな 人の世は」
(潮出版社・一五〇〇円)

経済学教授 石田浩著
「わがまま研究者の台湾奮戦記 近代化へ模索する台湾」
(晃洋書房・二八〇〇円)

商学部教授 大橋昭一他編著
「日本の経営とドイツの経営」
(千倉書房・九八〇〇円)

工学部教授 石井康敬他著
「エッセンシャル有機化学」
(化学同人・三六〇五円)

本書は著者が九三年十二月から約四か月間、台湾中央研究院で客員研究員として、台北で過ごした時に、素直な目で台湾を観察して書いたものである。著者は中国や台湾研究の権威であり、七六年に台湾を初訪問して以来、訪台歴二十数年に及び、数多くの研究成果を出版されている。本書は中国とのイデオロギー上の厳しい対立環境のもとで、中国に對抗しながら、近代化を模索する台湾の様子を解説したものである。

本書の体裁は日記風で、内容は台湾の政治、経済、歴史、社会文化、風俗習慣などを幅広く網羅するものである。本書は、著者が台湾を实地に検証して書いたものだけに、資料は第一級のものがばかりで、内容は迫真。今後、台湾研究の貴重な参考資料となる。台湾での研究生活の Handbook となる、絶好の書物である。また、本書は「わがまま研究者の中国奮戦記」の姉妹編に当たる。

本書はふだんに文献を読みなし、資料を駆使して書かれたものであるだけに、六〇ページに近い書物であり、読みごたえがある。長きにわたって価値をもち続ける書物であろう。座右の書として、手もとにおいておきたい。

今月の表紙



松原 一郎(まつはら いちろう) 教授 専攻は社会福祉学。研究と実践のつなぐに強い関心を持ち、兵庫県、神戸市などの復興計画にも専門の立場から参画している。

編集後記

阪神大震災の発生から一年が過ぎた。街は徐々に復興されてきたが、心の傷を癒すには時間がかかりそうだ。大震災では地球の隅々から多くの救援の手が寄せられたが、いち早い動きを示した大勢のボランティアの主力が学生であった意義は大きく、感動させられた。

二月は受験シーズン。本号では受験生を対象に本学の教育・研究活動の一面を紹介した。「ゼミは楽しい」と題して各学部で活躍されている先生方のゼミを紹介し、関大フォーラムでは「大学と生涯教育」について、また第一面には震災から一年「都市の復興と受験生の未来」をテーマに執筆していただいた。

テスト生活で今日を迎えられた被災地の受験生、ボランティアで活躍された諸君、希望に満ちた春はもつてくさす。

(西山 記)